

ISSN 2186 – 3989

「世間論」再考 –大正期と「世間」–

板倉 栄一郎

Rethink“Seken-Theory”
– “seken”in the Taisho era –

Eiichiro Itakura

北 陸 大 学 紀 要
第49号(2020年9月)抜刷

「世間論」再考—大正期と「世間」—

板倉 栄一郎*

Rethink“Seken-Theory”
—“seken”in the Taisho era—

Eiichiro Itakura*

Received April 14, 2020

Accepted June 15, 2020

Abstract

The purpose of this paper is to clarify the characteristics of the “seken” in the Taisho era. The first chapter clarified the actual state of “seken” with reference to two world books written in the late Meiji era. In other words, unlike the old “seken”, the rise of capitalism has changed the industrial structure, and the world has become more apparent. He confirmed that the people in the late Meiji era and the people in the Taisho era were the same. The second chapter focuses on the “new middle class” of the Taisho era, referring to the keyword “life consciousness”. The results revealed that the existence of the new middle class has created a new “seken” different from the old “seken”. In the third chapter, we analyzed the vast amount of data from Kunio Yanagida, obtained the result of a shift from average to appearance .

Key words : life-consciousness, new-middle-class, average, appearance

はじめに

社会学者の見田宗介は、大正末期に“流行”した一家心中の背景として、農村における自然秩序の解体と大家族制の実質的崩壊という現実を見取っている。見田によると、この“流行”は、最初に北海道の開拓農場に発生し、次いで全国の大都市（名古屋—東京—長野—神戸）に飛び火しており、それらはすべて、古くからの人と人との絆が一端、近代化の過程の中で見失われた地点を追うように分布しているという¹。

さて、本稿は、日本の近代化から現代へと移行する過程の中で、大正期における「世間」について考察することを目的とする。冒頭に記した見田の見解、すなわち、農村の自然秩序の解体と大家族制の実質的崩壊は、古くから脈々と続いた「世間」が、大正期を契機にその様相を異にしたのではないかという可能性を想起させ、頗る興味深い。

従来の「世間論」研究には、近代以降の「世間」を時代別に考察したものは管見の限りでは見当たらず、一括りで「世間」として扱われている²。しかしながら大正期を俯瞰する

*北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University

と、まず、日本国内では、日清・日露両戦争以降の資本主義経済の進展に伴って産業構造が変化するとともに、人の移動が活発に行われ、商品経済の発達による消費社会が進展した時代である。また、学歴社会の浸透や女性の社会進出、社会主義の台頭など、それ以前の日本社会には見られなかった特徴がある。次に、これらのことと関連して、経済格差の顕在化という観点から、「上位層（富裕層）－（新）中間層－下位層（貧困層）」という階層が各々に「世間」を構成しているという点を看過すべきではない。こうした大正期における日本社会の中で「世間」の実態を解明するためには、各層の生活実態や生活水準に目を向けて考察をする必要がある。

一方、国際社会に目を向けると、第一次世界大戦後の日本は「一等国」として世界から認められたが、これは日本史上、初めての出来事である。また、明治以降、外国の技術や知識、文化を導入しようとしてきた日本人の積極的な態度も見逃せない。従って、大正期は国際社会の影響も無視できない時代でもある。これらのことを踏まえて大正期の「世間」に改めて目を向けると、次のような素朴な疑問が湧いてくる。すなわち、このような状況下で、果たして歴史学者の阿部謹也が唱えた、「日本の近代化には旧来の人間関係－「世間」－が残ったまま、現在に至っている」という見解³には妥当性があるのだろうか。大正期を機にその性格が変化していくのではないだろうか。本稿の目的は、この「問い」に対して、歴史学だけでなく、様々な知見を活用しながら順次、考察を進めることで、一連の「世間論」研究に大正期の「世間」を位置付けることにある。

具体的には、第1章で、明治後期の「世間」の特徴を確認し、それが大正期の中でどのように位置付けられるのかを明らかにしたい。第2章では、大正期の新中間層を取り上げ、生活意識という視点から考察する。新中間層が「世間」に及ぼした影響について、これを、大正モダニズムや大衆文化という視点から捉えることで、その変質が明らかにできるのではないかと考えたからである⁴。第3章では、日本の民俗学の地平を開いた柳田国男の膨大な著作を参考に、「世間並」と「世間体」との関係を、社会構成（階層毎の相違）や地理的構成（農村と都市）、資本主義経済の進展という視点から捉えることで、大正期の「世間」の特質を明らかにしたい。

第1章 明治後期の2つの「世間」について

本章では、日露戦争以後に著された「世間」に関する2つの著書を取り上げて、明治後期の「世間」について確認し、大正期の「世間」を考察する前提としたい。一つは、広津柳浪の『世間』であり、もう一つは小栗風葉の『世間師』である⁵。この二人は、いずれも硯友社に属したことがあり、上記作品を著した時期もほぼ、同時期である。この2つの著書から富裕層の「世間」と貧困層の「世間」の共通点と相違点を確認しておきたい。

第1節 広津柳浪の『世間』と「世間体」

1907年（明治40）6月に祐文社から刊行。主人公（桃山春子）に想いを寄せられる男性（野島清雄）が、主人公の母（継母）の過去（重婚）を仕組み、それをネタに嫌がらせをする男（海野）に対して、世話になっている主人公の両親に対する義理を果たそうとすべく、男のもとへ向かうという小説である。そこには、「義理」、「恩」、「世間の評判（世間体）」、「名誉」、「家柄」など、「世間」に関係する内容が盛り込まれている。

阿部謹也は、この作品について、「これまで紹介してきた作品とはかなり異なってい

わゆる「世間」の描写となっている」と解説している⁶。それまでの「世間」に関する書物は、いわゆる「世間もの」と呼ばれるもので、明治以降も幾つかの作品が出版されているが、阿部によると、その作品の多くは井原西鶴に由来する語り口で面白おかしく「世間」を描き、混乱の時代を抜け目なく生きていく人びとの姿を描いているという⁷。それに対して広津の『世間』は、「世間」の実態を描写するという切り口であり、そこから当時の「世間」を知ることができる。そこで、「世間」に関係する具体的な例を幾つか挙げてみたい。

まず、春子の野島に対する純粋な想いが「世間」によって翻弄されるという内容であるが、その都度、「義理」「恩」という言葉が用いられている。また、春子の継母である喜美子が、夫であり銀行の頭取でもある春子の父、太仲の頭取としての「世間体」や紳士としての名誉を案じるあまり、過去を表沙汰することに悩む(喜美子は裕福な出自であったが、両親が海野に騙されて全財産をとられたという経緯がある)。さらには、太仲と喜美子の仲を“不釣り合い”として、太仲の甥である自分の息子(千吉)を春子の婿にしようと目論んだ千吉の母の存在など(因みに千吉は、太仲のコネで太仲が頭取を務める桃山銀行に入学)。そして、海野との経緯(海野は春子の友人である幸子の父親である)を喜美子から聞き出し、太仲の知らない間に海野と会って解決を図ろうとする野島。野島の行為は、太仲や喜美子から受けた義理や恩に対するものである。

全体を通して、登場人物各々が用いる上品な言葉遣いや太仲の社会的地位が高いことなど、都市の富裕層の世界を描いたものであるが、当時の日本社会からすると、その数は多くはない。そのような中で、阿部謹也が、「世間」の機能の一つとして挙げた義理人情が、小説を展開する上での重要な鍵となっている点を、ここで確認しておきたい。

第2節 小栗風葉の『世間師』と木賃宿の人々

『中央公論』に1908年(明治41)10月に発表。とある木賃宿に滞在した間に出会った世間師たちとの交流を描いた、筆者の若い頃の実体験をもとに執筆された小説である⁸。世間師とは、「世間をよく知っている者」の意味で、定住せずに旅から旅を繰り返しながら収入を得る人々のことである。その立場を利用して悪事を働く輩も、中にはいたらしい。

小栗は、貧民窟さながらの木賃宿を根城とする世間師たちの生活場面を生き活きと描写している。登場人物各々は、銭占屋(占い師)、万年屋の夫婦(万年筆売り)など、互いに名前呼び合わずに渾名で呼び合っている。その中で、銭占屋は、ある程度の蓄えがあり、なにかと主人公のことを気にかけてくれる人情味のある人物として描かれている。周囲はこの男を目の仇にしており、なんとかお金を遣わせようと企むが、「…銭占屋も年こそ若いけれど、世間を渡り歩いている男だ、容易にその手に乗らない」とある。まさに、世間を渡り歩く過程で「世間」の良しも悪しきも知り抜いた男の処世術である。

民俗学者の宮本常一によると、明治から大正、昭和の前半にいたる間、どの村にもこのような世間師が少なからず存在したという。文字を書くことすら覚束ない無学な者が多いが、時代に対する敏感なものを持っており、木賃宿を根城にして世の動きに対応して生きようと努力した人々である。そして、そのような姿勢は世間師だけでなく、村人にも見られたという⁹。ここで、木賃宿に住む人々の生活水準に注目してみたい。

木賃宿については、当時の貧民窟との関係で取り上げられることが多く、そこから貧困層の生活の実態を知ることができる。例えば、松原岩五郎の『最暗黒の東京』は、1893年(明治26年)に民友社から刊行された、明治中期頃の安価で不衛生な木賃宿に関するルポルタージュである。それによると、当時、貧民窟に住んでいたのは、越中、越後、加賀、越前等の北陸地方の屈強の働き人が多く¹⁰、その生活の実態については同著に譲るが、注

目したいのは、「あるいは縄もて仏壇を掲し、または古葛籠を掃めて神体を安置し、もって祖神、祖仏を奉祀するの崇敬心を壊らず。」という記述である¹¹。その日暮らしを強いられ、明日の生活の保障もない貧民窟に住む人々の祖神、祖仏を敬う気持ちが窺えるが、そこには、家の祖先を崇拝しなければならないという日本人の伝統的な意識が表れている。

また、『日本の下層社会』を著した横山源之助は、別の書で、日清戦争後、徐々に貧民窟の範囲が東京市内に拡大し、関西¹²や地方¹³から上京した人々も増え、その影響もあって木賃宿が共同長屋へ拡大した¹⁴ことなど、貧民窟の変質を指摘している。そして、そこに住む人々の職業も、従来の乞食、屑拾、芸人、行商人などの雑業を含め、日傭人足や人力車夫などの力役に拡大したこと¹⁵を明らかにしている。そのような状況の中で貧民窟に住む人も、「正月になると、やっぱり操業を休んで、正月然とした顔」をして、“世間並”に餅を口にしたり、髪を綺麗に結ったりするなど、横山は、その点に貧民窟に住む人々の“しおらしい義理”を見出している¹⁶。加えて、共同長屋での生活は、まさしく“共同の関係”であり、隣室の家族を“世間並”に“お隣り”と呼んでいる¹⁷と書き記している。因みに横山は、当時の貧民窟に居住する人々は、約52万人、東京市総人口の約三分の一弱としたが、区役所に無届の人々を合わせると東京市の半分以上が貧民窟に住む人々であろう¹⁸と見積もっている。また、日清戦争の結果、下層社会に購買力をもたらした¹⁹という記述があるが、生活水準が向上したかといえ、そうではなく、職人社会の生活の向上については疑問を呈している²⁰。その一方で、前述のように、東京市には地方から上京した人々も多いが、当然、「東京の貧民」として近代以前から土着していた人々もいる。

「東京の貧民」に関して、社会学者の中川清は、貧民窟の性格が前近代の背景から説明しようとするのに対して明確に否定している。中川は、「在京の貧民よりもむしろ流入した都市下層が、「貧民窟」独特の新たな共同性、すなわち社会一般とは異質な下層社会に依存する」と論じ、そこから、新しい貧民窟の成立、分布、特徴において、近代以前の関係とは明らかに相違していた²¹と断じている。このように、拡大する貧民層にも「世間」－貧困層独自の共同体－は存在したのであり、それは旧来の「世間」とは異なる様相を呈したと言える。

第2章 新中間層の「世間」について

前章で、明治後期における2つの「世間」の考察を通して、「世間」に階層による相違が認められる一方で、義理が存在するという共通点を確認した。この2つの「世間」と大正期の「世間」との繋がりについては、日清戦争以後の日本の資本主義経済の進展という視点で見ると、社会構成上、地続きであると捉えることができる。そこで本稿では、明治後期と大正期の「世間」は地続きであることを前提とするが、産業構造の変化や消費社会が進展したことで、「世間」も次第に変質していく。そして、その役割を担ったのが「新中間層」の存在である。本章では、まず、新中間層の生活水準という視点から「世間」を考察し、次いで、サラリーマン社会における贈与・互酬の原則から「世間」を考察したい。

第1節 新中間層の存在と生活水準

日清・日露両戦争を契機とする産業構造の変化、それに伴う日本社会の変貌によって経済格差が顕在化し始めた。その結果、富裕層には富裕層の、貧困層には貧困層の「世間」が存在することとなったが、これは近代以前の身分差に伴う各層の「世間」とは意味合い

が異なる。産業構造の変化や消費社会の出現は、近代以前には見られなかった生活の変化をもたらした。実際、第一次世界大戦後、生活難の克服に向けて「生活改善運動」が文部省主催で全国に向けて発信され、各々の生活水準の改善（向上）への意識を喚起したが、これも「世間」の行動原理の一つであると捉えることができる。従って、大正期の「世間」を論じる場合も生活意識という視点が重要であり、この視点から「世間」を論じる場合、大正期の特色の一つとして挙げられる「新中間層」の存在を挙げなければならない。

新中間層とは、学校教育を通して社会的な地位を獲得した者が構成する家族（主に核家族）のことであり、官公吏、教員、会社員、職業軍人などの俸給生活者のことを指す。本章では、サラリーマンに焦点を当てて考察をすることとする。サラリーマンは、1898（明治31）年には、「中流以上が質屋通い、入質お断り」の看板が出たことを取り上げる新聞もあり²²、当初から生活が安定していたわけではない。そして、資本主義経済の進展によって徐々に安定の兆しを見せ始めるのだが、関東大震災を機に都市中間層として、その存在を、より露わにした。歴史学者の井上寿一は、昭和前期の都市中間層の特徴を示すものとして、震災復興事業の一つであった「同潤会アパート」を取り挙げ、そこにアメリカの影響、中間層の育成、新しい生活様式の創出を見出している²³。アメリカは、第一次世界大戦後の文化的繁栄と大衆消費社会を実現したが、それが日本社会にももたらされたわけである。そもそも、アパートという名称がアメリカ的であり、活動写真（ハリウッド映画）、家庭電化製品、オペラ、ジャズ、モボ・モガなど、まさにアメリカ式都会主義²⁴が氾濫した。また、日本初の女性専用アパートが建設されたが、そこには医師、新聞記者、教員、タイピストなどの職業婦人の存在があり、女性の社会進出に伴った措置が背景にあった²⁵。その大半は、学校教育を経て職業に就いた職業婦人であり、これも大正期の特徴の一つである。家庭電化製品については、当時、流行した”文化”²⁶“を象徴的に表しており、女性の家事の効率化や家庭の在り方にも少なからず影響を及ぼしている。

このような状況下で、新中間層の存在が、日本社会における従来の生活水準の向上に影響を与えたことは、十分に推測できる。1920（大正9）年に「第一回国勢調査」が実施されたが、その時点で約55%が核家族であり、家の存在自体は、農村のような生活共同体・労働の場としての家ではなく、朝の通勤に向かい夕方に帰る場所としての家、家族が集う安らぎの空間としての家であった。また、社会学者の広田照幸が論じた「教育する家族の登場」²⁷は大正期における新中間層の特徴を端的に表している。井上は、昭和前期を対象としているが、少なくとも明治後期には台頭し、続く大正期における産業の発展や学歴社会の浸透によって徐々にその数を増やしていった。そして、その存在は、庶民には“あこがれ”として映ったであろうことが想像できる²⁸。

しかしながら、サラリーマンの実態は、必ずしも端で見るほど華やかなものではなかったらしい。1928（昭和3）年3月に出版された、前田一の『サラリマン物語』は、「自序」の冒頭で「サラリマン、それは一俸給生活者、一勤め人—高給取り—洋服細人—そして腰弁、—とその名称が何であれ、正体を洗へば、『洋服』と『月給』と『生活』とが、常に走馬灯のように循環的因果関係をなして、兎にも角にも『中産階級』とかいふ大きなスコープの中に祭り込まれている集団を指したものに違ひない」と記す²⁹。また、「苦しい中からも何とか工面しては体面とやらを保っているから（中略）今どき弁当箱をさげて歩く腰弁は見当たらない」（波線は筆者）と記している³⁰。このように、サラリーマンの実態は、消費社会に飲み込まれながら、体面（世間体）の維持に苦慮していることがわかる。そして、サラリーマンの立場からすると、田舎の親に学校を卒業させてもらい、サラリーマンになったが故に、田舎の人々や職場の人間などに対する世間体、そして自らが新中間層であるという自負心や収入面の安定から、安易に抜け出すことに戸惑いがあったと想像できる。

因みに、柳田国男は、この当時、「何だか東京人の目が怖くなっている」という上山草人の話を紹介し、それは人を怖れまいとする努力であると述べる³¹。そして喧嘩の話にまで及ぶのであるが、柳田によると、明治・大正年間にはこれが都会の特徴の一つであったという。また柳田は、別の著で、村を離れる理由として、村の生活に飽き、窮屈な社会道徳の監視から抜け出すことを挙げており³²、こうして上京した人々は、「人を他人と見、その親愛の地を互いに無視し合う風」であったという³³。ここに和合を重視する農村生活者と都市生活者との相違が窺える。

第2節 新中間層と贈与・互酬の原則

今一つ、新中間層について記しておきたい。それは、サラリーマン社会と贈与・互酬との関係についてである。

文化人類学者の米山正直は、ひとりの個人を取り巻く人間関係（つながり）と人間集団（まとまり）を、「血縁―地縁―社縁」の3つのカテゴリーに分類した。そして「社縁」について、「社というのは会社、結社の社である」とし、「なにかの目的が機縁になってつくられたつながりを指す」と定義する³⁴。サラリーマン社会は、この社縁の範疇に属する。農村における共同体は、生産活動を協同で担い、その一部を家族の生活に充てるのだが、サラリーマンは一日の大半を会社員として過ごし、業績向上という目的に向けて働き、会社から支払われる給与を家族の生活の糧にする。また、多くの場合、会社は家から離れており、交通手段を介して通勤する。農村の家は、生産拠点として昼夜問わず、血縁や地縁を中心に、同じ共同体の成員として協働する場であるが、サラリーマンの生産拠点（会社）は家から離れており、家は血縁者同志（家族）が一家団欒の場として存在する。従って、血縁（家族を除く）や地縁の関係性は薄い。とりわけ、地方から上京して学校を卒業したサラリーマンは、血縁や地縁から離れている分、生活をする上でも円滑な人間関係を築く上でも社縁を疎かにできない。阿部謹也が示した「世間」の行動原理の一つである「贈与・互酬の原則」は、新中間層については、この文脈から理解する必要がある。

阿部は、贈与・互酬の原則の例として中元・歳暮を挙げている³⁵。中元・歳暮の起源は、祖霊などの神への供え物を人々で共食するために配ったり送ったりする行為であり、それが次第に親、仲人、親方などの目上の者、親戚や知人に対して、主に米や餅、麺類、酒などの食料を送る習慣ができていった³⁶、という。これは神事であって、共同体（血縁、地縁）が対象である。そして、贈答としての中元・歳暮が本格的に盛んになったのは、明治以降とされる。その理由や特徴について、社会学者の安達正嗣は、大都市への人口集中に伴い、人々の交際範囲が拡大したこと、中元・歳暮の商品化が開始されたことに関して、デパートの存在の大きさを挙げている³⁷。また、「近代における都市化と産業化の進行により、地域社会との関係のうすい都市的状况においては、世間の相場をはかる判断基準が失われていく。」ことを指摘しており³⁸、これらのことから、中元・歳暮という行為がデパートを介した消費社会の中に組み込まれていったことがわかる。とりわけ、上京してサラリーマン生活を送る人たちにとっては、生活の糧という意味では、血縁、地縁よりも社縁に対する比重が高くなる³⁹。そして、郷里との関係も上京を果たした世代が次世代に引き継がれることで、それまでの血縁や地縁に対する関係も薄くなる。このことから、贈与・互酬の原則においては社縁が、その割合を多く占めようになると考えられよう。先に紹介した前田一は、続編として『続サラリーマン物語』を著した⁴⁰が、そこには、宴会や趣味、“付き合い”など、サラリーマン社会の日常が描かれており、社縁が日常に占める大きさを物語っている。

翻って、安達は、日本特有のコミュニケーション行動の規範としての贈答文化について、「日常生活を円滑に過ごしていくために、人びとの間の均衡が崩れないようにするバランサーが、互酬性に基づいた贈答行動であり、そこには上下関係を中心とした社会関係が介在している。よって贈答行動は、もっぱら上下関係にしたがったコミュニケーションである」と贈答文化と義理との関係を指摘している⁴¹。ここで、義理についても言及したい。

歴史学者の源了圓は、その著書で、義理を、①古くからの贈答儀礼に由来する行為に対する返礼としての義理、②信頼に対する呼応としての義理、③自己の体面を保持する意地としての義理、の3つ⁴²に大別する。源は、外的拘束力（世間体契機）を伴う義理の発生の契機を、近松門左衛門の一連の作品の中に求めている⁴³が、阿部もまた、「世間」の性格を近松などの「世間もの」から抽出したことから、義理の外的拘束力の端緒を江戸中期に求めている点では、両者は同じ見解である。しかしながら、そのことが大正期に台頭した新中間層にも該当するかは、別問題である。例えば、次章で触れることになるが、阿部は、贈与・互酬の行為を人格ではなく地位に対する行為であるとしている⁴⁴が、それらの行為が人格ではなく、地位という“立場に対して”の行為であるという指摘からしても、社縁との関係が深くなっていくことを思わせる。

また、先にも確認したように、新中間層は学歴社会と呼応するものである。「大正教養主義」という言葉がある⁴⁵が、それを担った旧制高校や大学は、端的に言えば、明治維新以来の西欧の文物を積極的に導入する場として機能し、前近代的な考え方を“古いもの”として否定する場でもある。そして、生活水準も、一定の収入が得られることで経済的に自立した生活が可能となる。従って、阿部が指摘した義理人情の場としての「世間」は、新中間層を見る限り、疑問とせざるを得ない。ただし、日本社会には、広津柳浪が描いた義理（②③）や貧困層の義理（①…イエの崇拜）も残存することから、当然、義理人情が消滅したとは言いつれないが、少なくとも新中間層の数が増えることで③一要素に、前節で確認した「世間体」も増えるという現象は、否定できないのではないだろうか。

第3章 「世間並」と「世間体」

柳田國男は、その著書で、田舎は都市を世間と考えていたことを紹介し⁴⁶、また別の著書では、他郷を総括して世間と言っていたこと⁴⁷を紹介している。この点について、柳田は都市を「世間」とであると限定したわけではなく、異郷の一つとして都市を「世間」と表現したことは容易に推測できる。要するに、自分が所属する村や地域以外のことを「世間」と呼んだわけである。これまで確認してきたように、資本主義の発展や産業構造の変化は、都市だけでなく農村の生活にも影響を及ぼしたが、そのような時代の流れの中で、旧来の「世間」は、果たして残存できたのであろうか。本章では、「世の中の変わり目」を見取った柳田の膨大な著書を参考に、生活水準に焦点を当てつつ、「世間並」と「世間体」という二つの言葉から「世間」の特質を明らかにしたい。

第1節 「世間体」の用例と仮説の提示

柳田は、農民（柳田が言う「常民」）に目を向けた民俗学者であり、柳田の一連の著作には、「世間」ならびに「世間」から派生する慣用語が幾つか存在する。しかしながら、「世間体」という語句に関しては、実に1ヶ所しか登場しない。その内容は、家屋の新築に前代生活の拘束があったとされるもので、「自分が建てた家でも、辛抱をしなければならぬ点

が発見されたとして、世間体というものには不知不識の間に導かれている。その拘束の種類が昔も今も多かった。それにわれわれは附いていくだけのいろいろの調和手段を知っていたのである。」。続いて、「大正一二年の震災は、関東地方の都市と農村において、古い新しいいろいろの家を破壊して、それにかからまる旧来の行きがかりを一掃してくれた。」とあり、「より良き将来を期すべく人々はこの機会を利用したのであった。」と結んでいる⁴⁸。これは、農村には農村なりの調和手段としての「世間体」が存在したことを表しており、その「世間体」に縛られながら生活を送っていたことが窺える。しかしながら、その「世間体」は、肯定的に受け入れられていたものではなく、関東大震災が旧来の行きがかりを一掃してくれたという記述は、旧来の窮屈な「世間体」が一掃されたことを意味する。

一般に「世間体」とは、世間に対する体裁や見栄を意味する。先に、広津柳浪の『世間』や前田一の『サラリマン物語』で富裕層や新中間層の「世間体」を確認したが、このことから「世間体」とは富裕層や新中間層が自らの立場を維持するために用いられ、「世間並」とは主に貧困層が人として“世間並”(=普通・常識)であろうと努めることを意味すると、一応は考えることができる。そのように考えると、時代が進み、生活水準の向上によって富裕層や新中間層の人口構成比率が徐々に高まるに連れて、理論上、「世間並」よりも「世間体」が増えてくることになる。柳田が記した先の「世間体」の記述については、家を作ることは農民からすると(富裕層や新中間層にとっても)、人生を送る上で滅多にない一大事業であったが、あまり目立たせないという心情を表す意味で「世間体」という語句を用いたのであろう。以上より、本節では、やや短絡的ではあるが、「世間体」を主に富裕層や新中間層の“立場”に対して用いられた語句であると一応、仮説を立てておきたい。

第2節 「世間並」の用例と女性の「世間」

前節での仮説を論証するために、再び、柳田の一連の著作を見ておきたい。「世の中の変わり目」を見取った柳田は、「世間並」をどのように解釈していたのであろうか。「世間並」について、5つの用例が窺える。

<表> 『定本 柳田国男集』記載の「世間並」の用例

	出典	記述	巻/頁
1	笑いの本願	以前仕来たりを追ひ世間並を要求し、人のする通りして居れば無事で…	七/216
2	明治大正史	女には世間並といふことが、いつも力強い拘束力になっていて…	二四/293
3	国語の管理者	尚、常識とか世間並といふような、内容の実は甚だ空漠なる言葉…	二九/217
4	国民性論	世間並、又は十人並といふ言葉が、ちっとも批判されずに久しく行はれて居たのは不幸なことだつた。	二九/505
5	女性生活史	十人並、世間並といふ言葉を、よく古い人たちは使ひました。	三十/35

* 『定本 柳田国男集』(全36巻) 筑摩書房 1985年(初出、1969年)より筆者作成

確認すべきは、農村社会の変化を書き記した柳田が、「世間並」を「常識」や「十人並」と同列で扱っており、かつそれらを“過去のもの”として見ているという点である。実際、農村社会の変容について、歴史学者の成田龍一の記述を借りれば、「いまや「日本の村々の隅々」までも「文明開化の嵐」が吹きまくっている」⁴⁹のであり、それは生活水準の向上と歩調を同じにしている。このことから、前節で示した仮説は、一応は成り立つのではな

いだろうか。民俗学者の宮本常一は、「世間のつきあい、あるいは世間態というようなものもあったが、はたで見ていてどうも人の邪魔をしないということが一番大事なことのものである」とし、続けて「世間態をやかましくいたり、家格をやかましくいうのは、われわれの家よりももう一まわり上にいる、村の支配層の中に見られるようにみえる」と記しており⁵⁰、当時の「世間体」と世代との関係を端的に示している。

尚、余談になるが、この時期には都市生活の贅沢に対して、主に農民からの批判がなされた。このことは、旧来の「世間」を温存することにも繋がり得る。しかしながら、「文明開化の風」をよそに、旧来の「世間」を維持することに対する様々な軋轢が生じたに違いない。とりわけ、村の変容を批判した当世代と、新聞・雑誌、大正期に普及したラジオ放送や活動写真などを通して都市の豊かさを知り、鉄道や自家用車などの交通手段や電話といった通信手段を通して都市を身近なものに感じる次世代とでは、世代間ギャップが生じることは当然、予測できる。このような、時代感覚のズレや世代間ギャップという存在も「世間」の特徴を示す有力な手掛かりになり得るであろう。

さて、ここで、農村における女性の「世間」にも若干、言及しておきたい。本節で示した「<表>-2」には、当時の女性にとって「世間並」という言葉が拘束力になっており、「少しでも出色の誉れがあれば、それはむしろ婚姻の妨げであった」ということが記されている。大正期は女性の社会進出の時代であり、消費社会の担い手としても位置付けられるが、農村では、依然として「世間並」を求められるのである。

婚姻について、宮本常一によると、遠い村と娘のやりとり（結婚）をするようになるのが明治末期頃からであったという⁵¹。そして、家の格式や財産のことをやかましく言うようになり、結婚式も派手になったが、それはまさしく「世間体」である。そして、大正期には、それを真似る家が徐々に増えてきたということ⁵²から、生活水準が向上したことを想起させるが、当時の結婚をする娘は、女性であるが故に、依然として「世間並」でなければならない。宮本によると、この頃は、小学校を卒業後に奉公に出されて行儀見習いをさせられたり、工場へ女工として働きに出されたりした娘が多くまた、言葉遣いへの配慮と義務は大きかったという⁵³これは、個人としての娘に対して「世間並」を求めているものである。そして、それらは、遠方の他家に嫁いで”世間知らず”の誹りを受けないため、また、しつけや言葉遣いを当家が重視していることを証として示すものであろう。このように、農村の娘は、都市の女性とは異なり、社会進出の面では遅れていたが、一方で、小さい頃からの奉公や旅⁵⁴、工場勤め等を通して、早い時期から「世間」を知るのである。

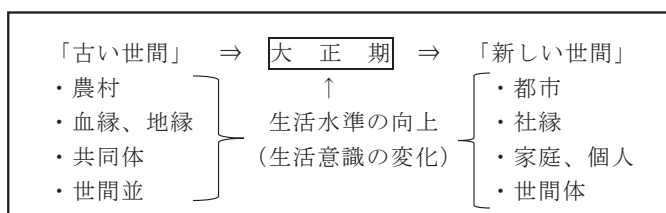
時代が進むに連れ生活水準が向上すると、家庭電化製品などの便利なものが農村にももたらされる。それは歓迎されることであるが、依然として大家族を賄うのが農村の嫁としての役割であった。「杓子渡し」は、姑が嫁に主婦権を譲って家政を任せることを意味する儀式であるが、この儀式は戦後しばらく続いた地域も存在した⁵⁵。戦後の「世間」について論じる場合、女性の社会進出や消費の主体として、また家族の担い手の中心としての女性の存在を視野に入れて考察すべきであると考えているが、ともあれ、農村の女性にとって新しいタイプの「世間」を身をもって感じるのは、しばらく先のことである。

おわりに―戦後の日本社会と「新しい世間」―

以上、生活水準という視点から、主に新中間層と「世間」との関係、ならびに「世間並」と「世間体」との関係について考察した。結論として、新中間層は、従来に見られなかった新しいタイプの「世間」を創出する役割を担った。すなわち、新中間層の出現は、それ

までの「古い世間」から「新しい世間」に移行する役割を果たしたと結論付けることは可能であろうということである。さらに、阿部が「世間」の行動原理の一つとした贈与・互酬の原則は、大正期における新中間層の拡大とそれに伴う生活水準の向上によって、血縁、地縁から社縁が重視されたと考えられ、要するに、個人間の“つながり”よりも、職位や身分などの立場に対する“まとまり”－いわゆる「場」の意識－に基づいた人間関係が優先されたのである。従って、贈与・互酬の性格も従来のものとは異なってくると考えられ、ここにもまた、「新しい世間」が出現する糸口が見えるのである。

さて、これまでの考察結果とも合わせて、「はじめに」で示した「問い」－日本の近代化には旧来の人間関係、すなわち「世間」が残ったまま、現在に至っているという見解は、大正期には当てはまるのだろうか－については、大正期を契機にその性格は変化していくと結論付けたい。その上で、本稿での考察結果を図示すると、以下のようになる。



社会心理学者の井上忠司は、「世間」をめぐる慣用語がことごとく「世間並」に収斂していることに注目している⁵⁶が、生活水準の向上という観点から「世間並」について考えた時、その水準が上昇し、「世間並」であることを維持しようと努めれば努めるほど、「世間体」を意識せざるを得なくなる。語句だけに注目すれば、井上が言うように「世間並」に収斂するということになるが、その実態は、生活水準の向上によって、「世間並」から、次第に地位や名誉などの立場を重視した「世間体」に移行していくと捉えることができるのではないだろうか。この「世間体」に囚われた「新しい世間」は、常に自己の立場を意識し、周囲の動向や雰囲気を目を配らなければならない息苦しさを持つものである⁵⁷。ここに、大正期を契機とした「世間並」から「世間体」への変質と「新しい世間」の特質が読み取れるのである。

翻って、ここで是非、記しておかなければならないことがある。それは、戦時体制と「世間」についてである。紙数の都合上、詳細に論じることは控えるが、部落会・町内会・隣組などの全国的な整備は、それが生活必需品の配給ルートとしても機能していたことから、これらの組織への参加や協力を拒むことは、事実上、不可能なことであった⁵⁸。殊に、農業生産を維持すべく、徴兵された男子に代わって、その担い手となったのは老人や女性であり⁵⁹、また、“贅沢は敵だ”“欲しがりません、勝つまでは”などのスローガンや戦争末期の集団疎開なども相俟って、日本社会に「古い世間」が一時的に浮上した⁶⁰。そして、「新しい世間」の再浮上の契機は、戦後の高度経済成長期を待たなければならない。

この「新しい世間」は、経済活動が復活し、それが地方の農村地域まで及ぶことで、日本社会を覆い尽くすことになる。本稿を執筆しながら、国際社会における「一等国」としての立場を除けば、戦後の高度経済成長期は大正期の“焼き直し”であるという感覚に襲われた。そして、戦後の「世間」について考察するに際しては、本稿で明らかにした「新

しい世間」を基準に、戦後、アメリカによってもたらされた民主主義やアメリカ文化、女性の社会進出や消費生活の主体、そして家族の担い手としての女性などにも言及しながら考察する必要がある。また、ネット社会という視点からの考察も現代社会における「世間」を解明する上で重要であり、これからの課題にしたい。

註

- 1 見田宗介「新しい望郷の歌」『まなごしの地獄－尽きなく生きることの社会学－』河出書房新社 2008年 80～82頁
- 2 阿部謹也『近代化と世間－私が見たヨーロッパと日本－』朝日文庫（初出、2006年）2014年。阿部は、「世間論」研究の嚆矢であり、何冊かの著書を世に問うているが、同著は最晩年のものである。従って、特に拘らない限り、阿部の見解は同著に拠るものとする。尚、阿部は、近代化の中に「世間」という古い人間関係が残存し、それが現在も続いているという立場を採ることから、一括りに「世間」と記したと考えられる。
- 3 阿部（註2）104頁、136～141頁 同著『日本人の歴史認識－「世間」という視点から－』岩波新書874 2004年 10頁、88頁 など。阿部は、「世間」の行動原理として、「贈与・互酬の原則」、「長幼の序」、「共通の時間意識」を挙げている。また、「世間」を義理人情の場であるとしている。（註2 104頁）
- 4 尚、阿部は、西洋社会は、「告解」と「都市化」によって「個人」が成立したことで「世間」が解体したと記している。本稿は、都市の新中間層に焦点を当てて考察をするが、日本社会における「都市化」が「世間」にどのように影響したかについては、「個人の成立」とも関係する深い問題でもあるので、ここでは立ち入らない。
- 5 これら2著書は、いずれも「国立国会図書館デジタルコレクション」に拠る
- 6 阿部謹也『日本人の歴史意識－「世間」という視点から－』岩波新書 2004年 92～93頁
- 7 阿部（註6）92頁
- 8 岡保生「「世間師」の成立」『国文学研究』30-7-14 1964年
- 9 宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫164-1 1985年 259頁
- 10 松原岩五郎『最暗黒の東京』講談社学術文庫2281 2015年 51頁
- 11 松原（註10）26頁
- 12 横山源之助「貧街十五年間の移動」（初出、『太陽』1912年）『明治東京下層生活誌（中川清編）』岩波文庫195-1 1994年 273～274頁
- 13 横山源之助「下級労働社会の一大矛盾」（初出、『太陽』1912年）『明治東京下層生活誌（中川清編）』岩波文庫195-1 1994年 284頁
- 14 横山源之助「下層社会の新現象 共同長屋」（初出、『新小説』1903年）『明治東京下層生活誌（中川清編）』岩波文庫195-1 1994年 200～208頁
- 15 横山（註14）208～210頁
- 16 横山源之助「貧民の正月」（初出、『文芸倶楽部』1909年）『明治東京下層生活誌（中川清編）』岩波文庫195-1 1994年 248～251頁
- 17 横山（註14）214頁
- 18 横山（註13）282頁

- 19 横山源之助『日本の下層社会』（初出、1899年）岩波文庫 109-1 2004年 357頁
- 20 横山（註18）102頁
- 21 中川清編『明治東京下層生活誌』岩波文庫 195-1 「解説」
- 22 加藤秀俊・加太こうじ・岩崎爾郎・後藤総一郎『追補 明治・大正・昭和世相史』社会思想社 1967年 135頁。当時の報知新聞に掲載されたものである。この記事には「而して其の入質者の多くは中以上の筋にありて、職人又は車夫等の下層社会には入りとてても却てか皆無なりと。」とある。
- 23 井上寿一『戦前昭和の社会』講談社現代新書 2098 2011年 28頁
- 24 吉見俊哉『親米と反米』岩波新書 1069 2007年 46～51頁
- 25 井上（註23）37頁
- 26 鷺田清一編集『大正＝歴史の踊り場とは何か－現代の起点を探る－』講談社選書メチエ 674 2018年 228～238頁
- 27 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか－「教育する家族」のゆくえ－』講談社現代新書 1448 1999年 「第2章 教育する家族の登場」
- 28 因みに井上は、「震災前はスラム街だった場所に近代的なアパートが建つことは、住環境の近代化であり社会の平準化につながる。他方で、震災の復興事業である以上、旧スラム街の住民も当初は居住していたが、家賃が払えなくなり退去を余儀なくされる人々が出る。代わりに相対的に豊かな勤労者世帯が入居する。」と記した上で、同潤会アパートは新しい格差の象徴ともなったと述べている。（井上（註23）38～39頁）
- 29 前田一の『サラリマン物語』については、岩瀬彰『「月給百円」サラリーマン』（講談社現代新書 1858 2006年 27頁）を参考にした。
- 30 岩瀬（註28）28～29頁
- 31 柳田國男『明治大正史・世相編（上）』講談社学術文庫 10 1991年 183～188頁
- 32 柳田國男『都市と農村』岩波文庫 138-11 2017年 31頁
- 33 柳田（註30）189頁
- 34 米山正直『新版 同時代の人類学－21世紀への展望－』日本放送出版協会 691 118～124頁
- 35 阿部（註2）89頁 尚、阿部は、贈与・互酬の原則について、マルセル・モースの見解に従い、それを呪術的であるとしてきたが、晩年になって、親鸞に触れた際（親鸞は呪術一切を否定してきた…筆者注）に、それを否定した（註2 141頁）。この点について、私見では、その起源が神事であり、またイエ存続の思想と祖先崇拜から、日本人の習慣として日本人に根付いたものであろうと考えており、殊更に義理人情を持ち出す必要はないと考えている。尚、このことに関しては、“御先祖様が見守ってくれている”や“お天道様が見ている”といった仏話や説話の教えに由来するものであり、風習や習俗に基づいた行為をしなければ、“落ち着かない”“気持ちが悪い”という「自己に内在化された意識」に繋がるものであると考えている。そして、この意識は現代の日本人にも残っているものであり、このことから、むしろ、子育てやしつけの歴史と風習や習俗との関係にまで研究の視野を拡大して考察する必要を感じている。
- 36 安達正嗣「コミュニケーションとしての贈答行動」 石川実・井上忠司編『生活文化を学ぶ人のために』世界思想社 2003年 173～174頁
- 37 安達（註35）174～176頁
- 38 安達（註35）176～177頁
- 39 米山（註33）120頁
- 40 「国立国会図書館デジタルコレクション」に拠る

- 41 安達（註 35）178～181 頁
- 42 源了圓『義理と人情－日本の心情の一考察－』中公新書 191 1978 年（初出 1969 年）
59～60 頁
- 43 源（註 42）122 頁
- 44 阿部（註 2）89 頁
- 45 竹内洋『教養主義の没落－変わりゆくエリート学生文化－』中公新書 1704 2003 年
39 頁
- 46 柳田（註 31）「一 都市を世間と考えた人々」
- 47 柳田國男「世間話の研究」『定本 柳田國男集』筑摩書房 1985 年（初出、1969 年）
394 頁
- 48 柳田（註 30）97～98 頁
- 49 成田龍一『日本近現代史④ 大正デモクラシー』岩波新書 1045 2007 年 178 頁
- 50 宮本（註 9）209 頁。因みに、宮本常一は 1907 年生まれである。また、宮本は、祖父
が亡くなったことを機に、何軒かの古い親類からつきあいを辞めようとの申し出があ
ったことを記している。（（註 9）208 頁）
- 51 宮本（註 9）98 頁
- 52 宮本（註 9）99 頁
- 53 宮本（註 9）「女の世間」参照
- 54 宮本（註 9）「女の世間」参照
- 55 「杓子渡し」は、それぞれの地方により表現が異なる。因みに、福井県のとある地方
では「しゃもじ渡し」と言い、昭和 20 年代まで続いた。（福井県立歴史博物館の常設
展示資料に拠る）
- 56 井上忠司『世間体の構造－社会心理史への試み－』講談社学術文庫 1852 2007 年
50 頁
- 57 この点に関して、社会学者の F. リースマンが指摘した「他人指向型」について、若干、
触れておきたい。周知のように、リースマンは、西洋の社会において、「伝統志向型（前
近代社会）→内部指向型（近代社会）→他人指向型（現代大衆社会）」の 3 つの類型を
示した。そして、他人指向型は、20 世紀のアメリカにおける大都市の上層中間階級に
もっとも早く現れ、その後、大衆社会状況の進展につれて広く一般化した。その性格
は、資本主義の高度化によって生産や仕事そのものよりもむしろ消費や人間関係に重
点が移ってくるような社会において支配的になる。一方で、阿部謹也の「世間論」の
核心の一つに、「日本社会には“個人がない”」という見解があるが、阿部の見解が妥
当であるとするならば、内部指向型は日本社会には存在しないことになる。この点に
ついて、前出、源了圓は、「日本社会は、伝統的社会がすでに、他人指向型の社会であ
った」と記している（註 42-43 頁）。源の指摘に対しては、先の註 35 で触れたよう
に、日本の風習や習俗を歴史的に考察したり、民俗学の知見を活用したりすることで、
その妥当性が検証できるのではないかと考えており、阿部の言う（西洋的な）個人と
日本社会における個人との相違にも言及しながら、いずれ考察を進めていきたい。
- 58 吉田裕『日本近現代史⑥ アジア・太平洋戦争』岩波新書 1047 2007 年 73～74 頁
- 59 吉田（註 57）105 頁